

凶しき女生める母に孝養せずして現に悪しき死の報を
得る縁 第二十四

故京に一の凶しき婦有り。姓名詳ならず。かつて孝する心無く、其の母を愛はず。母齋日に當りて飯を炊かず、齋食せむと思念ひてすなはち女の辺に就きて飯を乞ふ。其の女曰はく「今日家長と我れと、また齋食せむとす。此れを除きて以外は、余の母に供るもの無し」といふ。時に其の母稚き子有り。携きて家に還る。俛して道の頭を視れば、遺てられたる裹飯有り。拾ひて飯を慰む。なほ寢室に勞ひて夜半の後に、有る人來りて戸を叩きて曰はく「汝が女高く叫びて「吾が胸に釘有り。方將に死なむとす」といふ。故に往きて看るべし」といふ。母疲れ寝たるを以ちて、往きて活くこと得ず。其の女終に死にてまた相見はず。孝養せずして死ぬる、此れよりは如かず、分を譲りて母に供りて死なむには。

第二十四縁 惡業についての現報説話。今昔物語集・二十ノ三十二に書承。

一「所生母（孟蘭盆經）。二本書では「姓」は「姓（むす）よりもむしろ「氏」をさしている。底本訓釈「詳明也」。三在俗の仏教信者が戒を一日一夜まもる日。まもる戒は八齋戒（中巻十一縁）。祖先の忌日、六齋日（毎月八、十四、十五、二十三、二十九、三十日）、十齋日（毎月一、八、十四、十五、十八、二十三、二十四、二十八、二十九、三十日）、など。四一日一回、正午以前に食事すること。一日一食である。當時、俗家の生活では一日二食。齋食は、食事の内容にも制限があった。肉食は避けられた（凡月六齋日、公私皆斷殺生（鎌倉））。また、五辛も避けられた。上文に「不炊飯」とあるのは、齋日には火の使用も忌まれたか。五底本訓釈「俛（伏）か也、又即也」。六底本訓釈「裏津・三」。七底本訓釈「寝（爾太利）。八孝養せずして死ぬ、そのことは分を譲つて母に供つて死ぬることに及ばない。九「不孝養而」と「譲り分供母而死」とを比較し、「譲り分供母而死」をえらぶ。

第二十五縁 善業についての現報説話。今昔物語集・二十ノ四十一に書承。

九「少欲知足（妙法蓮華經・普賢菩薩勸発品、無量壽經・上）。「使（塞）己田口、水施百姓田」が、この表現に該当する。一〇慶雲三年（占）歿（統紀）。五十五歳（懷風藻）。「以壬申年功、詔贈從二位、大花上利金之子也（統紀・慶雲三年二月六日条）。二持統天皇。三未詳。同様の記事は日本書紀・持統天皇六年二月、三月、の条にみえる。万葉集・一・四四左注所引の「日本紀」は、「朱鳥六年壬辰」として同様の記事を載